

第9回

院内研究・実践発表会

UKBリサーチ2025

～発信しよう！部署での取り組み～

抄録集

口述発表 2025年11月7日(金)17:30~18:30



新潟大学地域医療教育センター
魚沼基幹病院

UKB リサーチ2025のご案内

○日程/会場

口述発表 2025年11月7日(金)17:30~18:30

講堂・多目的ホール

事務局 (問い合わせ先)

総務課教育研修推進係 担当：尾坂

内線：2335

E-mail : y-ozaka@ncmi.or.jp

演題一覧

QC (カイゼン) 部門 (演題番号 A 1 ~ A 5) 座長 :

藤原 浩 先生

新潟大学地域医療教育センター 特任教授

副病院長 (皮膚科)・医療安全管理部長

A-1 文書管理システム導入による作業とその運用効果

小林 徹¹⁾, 井口 啓太¹⁾, 丸山 奈穂¹⁾, 濵谷 大輔¹⁾, 今井 瑠美¹⁾, 柴田 真由美¹⁾, 飯野 則昭²⁾

1) 臨床検査科

2) 腎臓内科

A-2 受入不可検体削減の取り組みとその評価

林 美佳子¹⁾, 井口 啓太¹⁾, 柴田 真由美¹⁾, 飯野 則昭²⁾

1) 臨床検査科

2) 腎臓内科

A-3 産後ケア事業を振り返る

瀧沢 美由紀¹⁾, 武田 なつみ¹⁾, 鈴木 幸代²⁾, 大津 民恵²⁾, 加嶋 克則³⁾, 鈴木 美奈³⁾

1) アドバンス助産師

2) 看護師

3) 産婦人科医師

A-4 精神科認定看護師による経営参画

山崎 文雄¹⁾, 佐藤 一貴¹⁾, 小山 大介²⁾, 渡部 雄一郎³⁾

1) 東8階病棟 看護師

2) 看護部管理室 看護師

3) 新潟大学地域医療教育センター 医師

A-5 精神科リエゾンチームは何をしているのか? ~精神科認定看護師・特定看護師

の視点から~

佐藤 一貴¹⁾, 酒井 菜津子¹⁾, 山崎 文雄¹⁾, 山岸 宏和²⁾, 椿 昌子³⁾, 阿部 佳奈恵³⁾, 内海 拓弥³⁾, 渡部 雄一郎⁴⁾

1) 看護部

2) 薬剤部

3) 精神医療支援科

4) 診療部精神科

リサーチ部門 (演題番号B 1～B 4) 座長：

須田 剛士 先生

新潟大学地域医療教育センター 特任教授

副病院長 (消化器内科)・臨床研究推進部長・治験管理室長・新たな医療検討会議室長

B-1 グラム染色における固定方法の検討

坂西 清¹⁾, 杉山 貴大¹⁾, 伊藤 桜織¹⁾, 馬場 満¹⁾, 柴田 真由美¹⁾, 飯野 則昭²⁾

1) 臨床検査科

2) 腎臓内科

B-2 前処理を自動化したシクロスボリン、タクロリムス試薬の基礎的検討および導入の有用性

多川 裕介¹⁾, 吉川 康弘¹⁾, 伊藤 桜織¹⁾, 坂西 清¹⁾, 柴田 真由美¹⁾, 飯野 則昭²⁾

1) 臨床検査科

2) 腎臓内科

B-3 魚沼基幹病院における睡眠薬処方の推移

須藤 清香¹⁾, 山岸 宏和¹⁾, 関口 陽子¹⁾, 渡部 雄一郎²⁾

1) 薬剤部

2) 精神科

B-4 急性肺炎患者におけるAssessment of Swallowing Ability for Pneumoniaと誤嚥の関連

石崎 雅史¹⁾, 渡辺 慶大¹⁾, 丸山 航輝¹⁾, 今井 混太¹⁾, 今井 遼太²⁾, 佐藤 陽一²⁾, 本田 耕平³⁾

1) リハビリテーション技術科 言語聴覚士

2) リハビリテーション技術科 理学療法士

3) 耳鼻咽喉科 医師

A-1 文書管理システム導入による作業とその運用効果

小林徹¹⁾、井口啓太¹⁾、丸山奈穂¹⁾、濵谷大輔¹⁾、今井瑠美¹⁾、柴田真由美¹⁾、飯野則昭²⁾

1) 臨床検査科

2) 腎臓内科

【key word】文書管理システム、運用効果、文書回覧

【はじめに】文書管理者の視点から文書管理システム(以下 Lab' Q)についてこれまでに行った作業とその運用効果、今後の課題と展望について報告する。

【運用開始前】臨床検査科の部門や要員、文書を格納するフォルダや文書登録などの Lab' Q 内の設定、操作マニュアルの作成と要員への操作説明などを行った。

【運用開始後】検査科内の部門異動・入職・退職時の要員の設定、年度毎のフォルダ作成、データのバックアップなどを行っている。

【運用効果】紙で文書回覧していた時は回覧中に文書の紛失があったが、Lab' Q で承認ルートという機能を使用し、確認、承認、周知を行うことで、回覧文書の紛失がなくなり、どこで文書が滞っているかもすぐに把握できるようになった。

【課題と展望】文書はその作成者に承認ルートを選択してもらい回覧を行っているが、度々選択間違いが発生している。そのため要員へ操作の説明や承認ルートの設定を間違えないように選択できるような誘導、マニュアルの作成が重要である。今後は Lab' Q のメリットを生かし、文書管理の最適化を行っていきたい。

A-2 受入不可検体削減の取り組みとその評価

林美佳子¹⁾、井口啓太¹⁾、柴田真由美¹⁾、飯野則昭²⁾

1) 臨床検査科

2) 腎臓内科

【key word】受入不可検体 凝固採血管 採血量

【目的】適切な検体の受取は検査結果の正確性や信頼性に大きく影響するため重要である。受入不可検体の発生要因を分析し、受入不可減少に向けた対策を講じてその効果を検証する。

【方法】2024年4月から2025年1月に提出された血液検体について分析した。対策1: 2025年2月に量過不足の割合の高い凝固採血管の採血量について各部署に注意喚起のお知らせを配布した。対策2: 2025年6月に凝固採血管ラベルに量厳守の印字を開始した。対策を行った前後3か月の受入不可検体割合で効果を検証した。

【結果】対策前の受入不可割合は生化学0.2%、血算0.3%、凝固1.2%、血糖0.03%であった。割合の高い凝固検体の受入不可理由は量過不足57%、凝固21%、溶血17%であった。量過不足による受入不可割合は対策1の後57%から47%、対策2の後33%に減少した。

【考察】お知らせ配布の効果は短期的であり、繰り返し注意喚起が必要と考えられた。採血管ラベルの印字は、持続的な減少を認めた。採血時の視覚的かつ恒常的なアプローチであり、継続的な効果の維持に有效であることが示唆された。

A-3 産後ケア事業を振り返る

瀧沢美由紀¹⁾、武田なつみ¹⁾、鈴木幸代²⁾、大津民恵²⁾、加嶋克則³⁾、鈴木美奈³⁾

- 1)アドバンス助産師
- 2)看護師
- 3)産婦人科医師

【key word】産後ケア事業 アドバンス助産師 育児支援

【目的】当院の産後ケアは利用者のニーズに添えていたか、切れ目のない育児支援ができたか、アドバンス助産師の専門性発揮とやりがいの向上に繋がったかを明らかにする。

【方法】利用者の声、保健師への聞き取り、助産師への質問紙による調査。

【結果】利用者のケアに対する満足度は高かった。地域からは、慣れた環境でケアを受けてもらえる安心感がある、利用施設の選択肢が増えて良かったという意見が聞かれた。助産師は、専門性を活かせ、個人の学びになる、利用者の役に立ててやりがいがあると感じていた。一方、専任で担当できず利用者を優先できない葛藤もあった。空床の有効活用につながっているという意見も聞かれた。

【考察】当院の産後ケアは、地域の母子保健サービスの向上に貢献しており、分娩した施設でケアを受ける利点を各々が感じていた。助産師は、利用者のニーズに応えようとする過程で専門性と自律性を見出し、それを満せたと実感した際にやりがいを感じていた。今回の振り返りから、より良い産後ケアに向けた課題がいくつか示唆された。

A-4 精神科認定看護師による経営参画

山崎文雄¹⁾、佐藤一貴¹⁾、小山大介²⁾、渡部雄一郎³⁾

- 1)東8階病棟 看護師
- 2)看護部管理室 看護師
- 3)新潟大学地域医療教育センター 医師

【key word】精神科認定看護師、診療報酬、経営的視点

【目的】2016年に精神科急性期医師配置加算が新設されたものの、精神科認定看護師が不在で算定できずにいた。精神科認定看護師による経営参画について明らかにすることを目的として、精神科急性期医師配置加算の推移を調べた。

【方法】2021年4月に精神科認定看護師が赴任したのを機に、6月に精神科リエゾンチーム加算、8月には精神科急性期医師配置加算の算定を開始した。さらに、精神科認定看護師を専任看護師として、2025年2月に認知症ケア加算1の算定を開始した。

【結果】精神科急性期医師配置加算は2021年度が3185万円、2022年度が5654万円、2023年度が7807万円、2024年度が7374万円であった。

【考察】精神科認定看護師の赴任と育成が病院収益の増大に繋がった。今後、急性期充実体制加算の算定を目指している。その要件には精神科リエゾンチーム加算や認知症ケア加算1が含まれており、さらなる経営参画を推進していく。

A-5 精神科リエゾンチームは何をしているのか？～精神科認定看護師・特定看護師の視点から～

佐藤一貴¹⁾，酒井菜津子¹⁾，山崎文雄¹⁾，山岸宏和²⁾，椿昌子³⁾，阿部佳奈恵³⁾，内海拓弥³⁾，渡部雄一郎⁴⁾

- 1)看護部
- 2)薬剤部
- 3)精神医療支援科
- 4)診療部精神科

【key word】精神科リエゾンチーム，精神科認定看護師，特定看護師

【目的】精神科リエゾンチームの活動を可視化し、看護師間で共有することによって、患者ケアの向上に繋げることが求められている。そこで 2024 年度の介入内容を分類するとともに、今後の課題について精神科認定看護師・特定看護師の視点でまとめた。

【方法】2024 年度の介入内容を、先行研究に基づいて 5 つのカテゴリーに分類した。

【結果】延べ介入件数 309 件のうち、「患者への直接的介入」が 235 件(76%)と 8 割弱を占めた。以下、「医療者に対する教育的支援」38 件(12%)、「医療者に対する情緒的支援」25 件(8%)、「家族支援」6 件(2%)、「調整および橋渡し」5 件(2%)であった。

【考察】精神科リエゾンチームとして関わることで、薬剤調整による効果や反応の確認、患者の訴えを傾聴し問題に対する対策を検討するなど直接的介入は多岐に渡る。院内の精神科看護の質を向上させるためにも今後は、介入件数が約 1 割にとどまっている「医療者に対する教育的支援」を強化することが課題である。病棟のニーズを把握しそれに応じた教育支援を実施していく必要がある。

B-1 グラム染色における固定方法の検討

坂西清¹⁾, 杉山貴大¹⁾, 伊藤桜織¹⁾, 馬場満¹⁾, 柴田真由美¹⁾, 飯野則昭²⁾

- 1) 臨床検査科
- 2) 腎臓内科

【key word】 グラム染色, アルコール固定, メタノール, エタノール

【はじめに】 グラム染色のアルコール固定で用いるメタノールは6ヶ月に一度の作業環境測定及び健康診断が必要とされる人体に影響のある有機溶剤である。今回、我々はメタノールの代用として有機溶剤でないエタノール固定が日常業務で有用か検討したので報告する。

【方法】 コロニーより作成したスライドをメタノール及びエタノール固定を実施した。技師間差を考慮し染色は技師2名で行い、鏡顕は細菌担当者及び他部門の技師で判定を実施した。また実検体のスライドで細胞像、貪食像を比較した。

【結果】 コロニーより作成したスライドで一部の技師で球菌・桿菌の判定の差があったが、固定方法及び技師の手技による染色の差は無く、実検体でも菌体及び上皮、貪食像における技師の判定の差は無かった。

【まとめ及び考察】 今回の検討において固定法による各技師の判定及び染色差はみられなく日常の業務でエタノール固定は有用であると考えられた。今後も日常検査に照らし合わせ検査実施者にとってより安全な検査ができるよう検討を重ねていきたい。

B-2 前処理を自動化したシクロスボリン、タクロリムス試薬の基礎的検討および導入の有用性

多川裕介¹⁾, 吉川康弘¹⁾, 伊藤桜織¹⁾, 坂西清¹⁾, 柴田真由美¹⁾, 飯野則昭²⁾

- 1) 臨床検査科
- 2) 腎臓内科

【key word】 業務効率化, 試薬検討, 誤差の軽減

【目的】 当院においてタクロリムス(以下TAC)、シクロスボリン(以下CYA)の測定は手作業による前処理を行っている。今回、手作業による前処理が不要なTAC、CYAの測定試薬の基礎検討と現行試薬での前処理による技師間差、検討法と現行法のTATの比較を行ったので報告する。

【検討内容】 ①併行精度 ②室内再現精度 ③相関性 ④技師間差 ⑤測定時間

【結果】 ①併行精度: CV 0.7~3.2%。②室内再現精度: CV 1.1~4.0%。③相関性: TAC y=0.9830x+0.1860 r=0.9447, CYA y=0.9604x+2.4404 r=0.9504。④技師間差: 1.7~11.5%。t検定による有意差なし。⑤測定時間: 検討法は推定約30~40分。現行法は平均50分。

【考察】 基礎検討および相関性は良好な結果であった。現行法では技師間差は認められなかつたが、検討試薬導入により手技による誤差を回避できる利点がある。また、前処理不要のためTATの短縮が予想され、業務の効率化が期待できる。

B-3 魚沼基幹病院における睡眠薬処方の推移

須藤清香¹⁾, 山岸宏和¹⁾, 関口陽子¹⁾, 渡部雄一郎²⁾

1) 薬剤部, 2) 精神科

【key word】睡眠薬、ベンゾジアゼピン受容体作動薬、オレキシン受容体拮抗薬

【目的】当院における睡眠薬の処方実態を把握するためその推移を調べた。

【方法】2015年6月～2025年3月における入院患者1人あたりの睡眠薬用量(mg)の推移を精神科と他科の間で比較した。

【結果】ベンゾジアゼピン受容体作動薬(BZRA)のフルニトラゼパム換算量は、精神科が1.26から0.40と68%減ったのに対し、他科は0.19から0.12と35%の減少にとどまった。BZRAにプロチゾラムが占める割合は、精神科が45%から20%に減った一方、他科は26%から31%に増えた。BZRAにエスゾビクロムが占める割合は、精神科が0%から14%、他科は0%から36%に増えた。レンボレキサントの用量は、精神科が2022年度に4.30まで増加後2.83に減少、他科は0.66まで漸増した。

【考察】精神科では他科に比べ、依存やせん妄のリスクがあるBZRAよりオレキシン受容体拮抗薬が選択されるようになってきた。また2023年に当院の不眠時指示がプロチゾラムとエスゾビクロムに統一された影響も考えられた。

B-4 急性肺炎患者における Assessment of Swallowing Ability for Pneumonia と誤嚥の関連

石崎 雅史¹⁾, 渡辺 慶大¹⁾, 丸山 航輝¹⁾, 今井 混太¹⁾, 今井 遼太²⁾, 佐藤 陽一²⁾, 本田 耕平³⁾

1)リハビリテーション技術科 言語聴覚士
2)リハビリテーション技術科 理学療法士
3)耳鼻咽喉科 医師

【key word】ASAP, 嘔下内視鏡検査, 嘔下機能, スクリーニング, 誤嚥

【目的】嚥下内視鏡検査(VE)における誤嚥の有無とAssessment of Swallowing Ability for Pneumonia(ASAP)との関連性を分析し、ASAPの嚥下機能評価としての臨床的な妥当性を検討する。

【方法】本研究は、VEと同日にASAPを実施した83名(年齢中央値82歳、男性69名、A-DROP中央値2点)を対象とした横断研究である。従属変数を誤嚥の有無(誤嚥あり群43名、51.8%)とし、ASAPスコア・年齢・性別・BMIで調整したモデル1、ASAPスコアと嚥下関連要因(Food Intake Level Scale[FILS]・身体機能・栄養状態・肺炎重症度・服薬数)で調整したモデル2で二項ロジスティック回帰を行った。本研究は倫理委員会の承認を受けた(E2025001801)。

【結果】モデル1では、ASAPスコアのみ誤嚥と関連があり、(オッズ比0.951, 95%CI 0.923–0.980)モデル2では、ASAPスコア(オッズ比0.962, 95%CI 0.923–0.980)とFILS(オッズ比0.666, 95%CI 0.473–0.936)に有意な関連があった。

【考察】ASAPは誤嚥の独立関連因子であり、臨床的に妥当なツールである可能性がある。